

## トルコ遠征記

——第4回トルコ学生ロボットコンテストに参加して——

香川県立三豊工業高等学校 電子科 岸上 尚哉

### 1. はじめに

本校は香川県の西端にある高校で、機械科、電気科、電子科の3つの学科からなる工業高校である。私の在籍する電子科では電子回路やコンピュータ、制御などを中心に学習しており、電子科で学んだことを生かし、技能検定や電気工事士、情報処理技術者試験などの国家資格にも挑戦している。また、本校は部活動も盛んで、ほとんどの生徒が部活動に取り組み、充実した学校生活を過ごしている。私はメカトロ部に所属し、ロボット相撲やマイコンカーラリー、ロボットアメリカンフットボールなどのロボット競技大会に挑戦しながら、工業に関する技術や技能を磨いている。

### 2. 出場した経緯

エルトゥールル号事件から120年目の節目を迎え、日本とトルコの友好を深める「2010年トルコにおける日本年」の中で、数ある競技から「ロボット相撲」が選ばれ、JICA（国際協力機構）を通じてトルコ共和国からロボット相撲大会事務局（富士ソフト株式会社）に出場要請があった。トルコのロボット相撲大会は、自立型が積極的に行われており、自立型の代表ということで、昨年の全国高校生大会と全日本大会優勝チームである本校2台が選ばれ、トルコ政府から日本代表として正式に招待された。

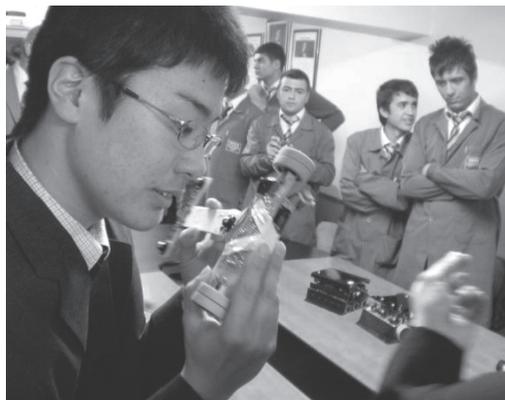
トルコ学生ロボットコンテストとは、トルコにおけるロボット技術を向上させること、もの

づくり文化を根付かせることを目的として、高校生と大学生を対象に2007年2月から毎年開催されている大会である。開催競技の種類としては、ロボット相撲の他、ライトレースロボット、ロボットコンテストなどの競技があり、第1回から回を重ねるたびに参加チームは増え、今回で第4回目となる大会である。高校生や大学生が、日頃からの取り組んだ成果を競う場としての盛大なイベントである。その大会の様子やホームステイなどで体験したことについて紹介する。

### 3. トルコでの活動

#### (1) 学校訪問について

5月3日、全国工業高等学校長協会の橋本三男事務局長を団長として、全日本ロボット相撲大会事務局の金井健事務局長（富士ソフト株式会社）、選手2名、生徒1名、教員2名の計7



学校訪問の様子

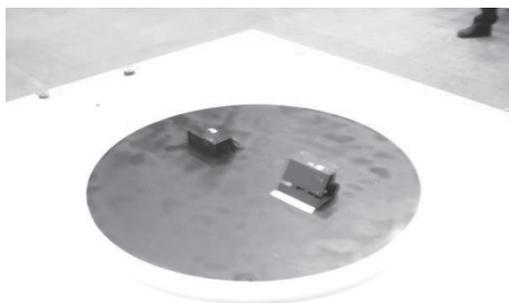
名のトルコ遠征団が関西国際空港より出発した。

5月4日、トルコの首都アンカラへ到着後、日本では工業高校にあたるISKITLERという学校を訪問した。創立32年の学校で生徒数は約2000名、学科は自動制御科、電気電子科、金属加工科、機械科、情報技術科、土木科、建設技術科の7学科からなる。自動制御科での相撲ロボット、ライトレースロボットの製作や操作練習に取り組んでいたところを見学した。

言葉はなかなか通じなかったものの、ロボットの特徴や仕組みなどを丁寧に説明してもらいながら、「トルコの学生に負けてたまるか！」という気持ちにもなり、全力で勝負を挑み、日本の技術力の高さを証明したいと思った。学生たちがロボット製作への強い意欲をもって楽しく取り組んでいたのがとても印象的である。

## (2) デモンストレーション

5月5日、会場での打ち合わせのあと、デモ



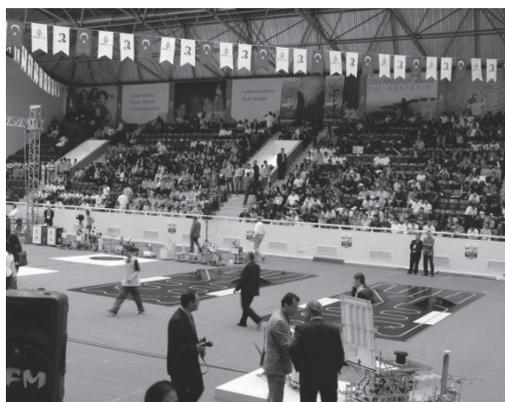
側面を向けた状態での立ち合い

ンストレーションが行われた。競技規則は日本の大会とは異なっているところが多くあった。例えば、日本では仕切りの際にロボット同士を正面に向けて対戦するが、今大会では側面を向け対戦を開始するものである。さらに、土俵（鋼板）の状態を確認したが色にムラがあり凹凸感も若干あった。

## (3) 大会

5月6日、7日、トルコの技術に対抗し、今まで戦ったことのない条件のなかで、日本での大会のような戦い方ができるのかという不安を抱いたまま、いよいよロボット相撲大会が始まった。大会は高校生だけでなく大学生も参加しており、合計66台でのトーナメント形式で行われた。

ロボットを整備している間には、多くのトル



会場内



大会会場にて（左から富田，岸上，長谷川）



ロボット整備の様子



整備時間を利用したの記念撮影



表彰式の様子



試合の様子（向こう側が富田選手）

この学生や先生が見学に来て、ロボットの製作技術だけでなく、日本での生活や文化などについて質問攻めにあった。言葉があまり通じず、片言で覚えたトルコ語は、ほとんど通用しなかったが何とか身振り手振りで答え、トルコの高校生や大学生、先生方と意義のある交流ができた。

言葉という壁を乗り越えてロボットの製作への強い意欲と情熱、また日本人に対する厚い思いを感じることもでき、私たちがロボット製作に懸ける気持ちと同じであると実感することができた。

大会については、勝ち進んで行くにつれて対戦するトルコのロボットが日本のロボットと比べて性能も同等、もしくはそれ以上になり、ますます厳しい戦いが続いた。三豊工の1台は準

決勝まで勝ち上がり、日本でもトップレベルに相当するロボットとの対戦となり、善戦はしたものの敗れてしまったが、3位決定戦では最大限の力を出し切り勝利することができた。その結果、日本でのロボット相撲大会と若干異なったルールや土俵の状態のなかで、思いどおりの試合ができなかったが、OBの富田将吾選手が3位に入賞し、また、長谷川優選手も8位という成績を残すことができた。私たちは日本の代表として、恥じることはない立派な試合ができたことを誇りに思っている。

トルコの相撲ロボットの製作技術については、日本の技術に匹敵するものも多数あり、これから更に技術が向上していくと思った。またいつの日か、トルコ選手が日本で行われるロボット相撲大会へ参加することを期待している。



アタテュルク廟にて

#### 4. ホームステイについて

大会後は、アンカラ市内の観光名所であるアタテュルク廟、アンカラ城、アナトリア文明博物館などを見学することができ、トルコの歴史の一端に触れるとともに、ヨーロッパとアジアが一緒になったような独特の文化に、驚きと発見があった。

ホームステイでは、トルコはイスラム教徒が99%ということもあり、礼拝儀式、右手を使うマナー、豚肉食用禁止などの日本と違った習慣や言葉の不安のなか、トルコ会話辞書を片手にホストファミリーと会った。とても陽気な家族で、夕食会ではトルコの家庭料理など盛大なもてなしを受け、抱いていた不安は一気に吹き飛んだ。また、トルコの生活の様子や日本との文化の違いなどについての話は尽きることがなく、トルコ人の考え方や価値観、日本人に対する思いを知ることができ、楽しい一時を過ごすことができた。

#### 5. おわりに

ロボットコンテストやホームステイという貴重な体験ができたことは、「2010年トルコにおける日本年」における使命を果たしたことにとなり、一日本人としてトルコとのさらなる交流を図るよい機会となった。何千キロも離れたアジア両端の国が120年の助け合いで築かれた友好の中、競技の勝ち負けよりも大切な何かを与

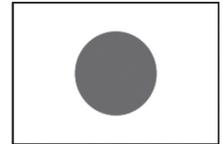


ホストファミリー全員と

えてくれたと同時に、さらに「両国のよい架け橋」となった。

今回のトルコ遠征でお世話になった、全工協の橋本三男事務局長をはじめ、全日本ロボット相撲大会事務局の金井健事務局長、先生方、OBの方々に感謝の気持ちで一杯である。

今後、この経験を社会でも生かし、日本だけでなく海外でも活躍できる技術者として、頑張っていきたいと思う。



#### —トルコと日本の友好関係について—

明治23年、オスマン・トルコ帝国の軍艦エルトゥールル号が和歌山県串本町大島沖で台風に遭遇し沈没した際に、大島の島民は遭難者を救助しようと献身的に働き、負傷者の介護や食事の世話などを不眠不休で行った。69名の乗組員の命を救い、日本の軍艦「金剛」「比叡」でトルコへ送り、トルコ国民の心からの感謝で迎えられた。それから、95年後の昭和63年3月18日、イラン・イラク戦争の最中、イラクのフセイン大統領は、イラン上空を通るすべての飛行機を撃墜すると警告した。現地には200名以上の日本人が取り残されて日本への飛行を断念していたそのとき、親日家のオザール首相は、危険を承知でトルコ航空機2機を派遣し、在イランの日本人はトルコ航空機によって無事救出された。日本大使館のお礼の言葉に対してオザール首相は、「エルトゥールル号のお返し」だと述べている。この救出劇に対して、わが国のマスコミは「トルコからの救いの翼」と称えた。彼らトルコ人は今でも昔の恩義を忘れていないということである。